

ホトトギス

昭和二十四年五月十八日発刊
昭和四年六月一日発行（第四百二十五巻第六号）

ホトトギス

六月号



風雅の小筥（五十二）

廣太郎

丸ビル七五三区にホトトギス社が事務所を構えている時に就職した私であるが、その時の編集長はホトトギス同人松尾緑富氏であった。古くからの読者は御存知であるが、昭和五十六年四月八日の虚子忌の帰りに、当時の編集長（一説には正式な編集長の肩書は無かったとも言われているが）であった湯淺桃邑氏が不慮の事故に遭い、十四日に急逝するという大事件があり、急遽緑富氏をそれまでの職場から引き抜いたという出来事があった。氏はホトトギスの世界では高濱年尾の側近中の側近として同じくホトトギス同人の桑田青虎氏と共に「年尾の助さん格さん」と称されていた。

緑富氏のホトトギス社での仕事は凄まじく、それまで結構遅刊していたホトトギスの発行をあれよあれよと前月二十日発行を実現したのである。私もホトトギス社に入社してからは、連日深夜まで残業をし、当時土曜日は一般的には半ドンという会社が多く、そろそろ週休二日制が囁かれていた時代であるが、土曜日はフルタイムであり、日曜日でも出勤の日が多かった。所謂「エコノミックアニマル」と言われていた日本人の典型のような人だったのかも知れないが、ホトトギスにとっては、氏のおかげで、その後の隆盛へと繋がる事になるのである。

そんな日曜出勤で思い出すのは、当時の丸の内はオフィス街であったが、現在ののようにブランドの店等は無く、日曜日になると、平日の賑わいとは裏腹に全くのゴーストタウンの様相を呈するのである。その差というのが少し不気味に感じたのも懐かしく思い出す。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年六月二日 NHK文化センター

コーヒートの香り立つより明易し
著我量八畳程の広がり
額の花風を平らに均しゆく
十葉の八重に羽音の集まり来
咲くものに五月雨傘を傾けて

六月三日 蕉心会通信句会

微の香に事務の手暫し置きにけり
黒南風に灯り初めたる電波塔
ギヤマンの皿青々と夏大根
石庭の歴史を秘めて苔の花
せせらぎを対旋律に河鹿鳴く
通し鴨池の仔細を知り尽し
夜釣人東京湾を友として

六月四日 六甲会

亀の子の逃げて緑日果てにけり
夏霧に視界閉ざされゆく車窓
誘蛾灯魂召されゆく静寂
亀の子や名前付けられ飽きられて
亀の子に城濠といふ余生かな
誘蛾灯逢魔が時の輝きに
四次元の扉開けたる誘蛾灯
黒南風に新幹線の揺れ通し
亀の子に驚の視線の優しかり

六月五日 芦屋ホトリギス会

鰻食ぶ東下りも四十年
代掻いて水の機嫌を伺へる
六月六日 野分会芦屋例会ハイブリッド句会

音の無き音聞いてゐる五月間
ぶつかつてぶつかつて伸ぶ蟻の道
蟻の道ゴルゴダの丘目差すかに

六月六日 青風会菅屋例会

孫の遺る水に紫蘇の葉喜べり
家蜘蛛や築百年の主として
青空へ一筆書や蜘蛛の糸
紫蘇の葉を刻み故郷香りけり
大蜘蛛に部屋空氣の一変す

六月十日 土筆会不在投句

夏桑の漆黒といふ青さかな
伊予の風根岸の風や柿の花
草取や庭の歳月見極めて

六月十日 カトリック新聞選者吟

川狩の命尊く食しけり
薫風に乗りに汽笛の遠ざかる

六月十四日朝日カルチャー若草句会

古池に風新しく花菖蒲
薫風に吐き出されゆく森の精
一片の雲消ゆるより風薫る
花菖蒲画布に描ける風の色

六月十五日 北國文芸選者吟

動かざる豪華客船風薫る

六月十七日 登高会

天辺は天使のためのさくらんぼ
さくらんぼ茎の長さにある主張
古都といふ葎實に透けてゐる生活
糸蜻蛉草に命を絡ませて
六月十八日 廣邦会
明易や君の秘密を知りてより

花菖蒲雨粒溜めて暮れ残る
六月二十二日 若水句会選者吟

鹿の子の目若草山を宿らせて
夏服の孫に日差の微笑める
竹の皮脱ぐ劍豪は動かざる

六月二十三日 目黒学園句会

藤椅子や虚子山荘の主として
虚子の世の速き夢見し藤寝椅子
老鶯に山氣靈氣と変りゆく
藤寝椅子父の思ひ出てふ凹み
沖繩の忌日鶯老を鳴く
ががんぼの脚にたましひ宿らせて
友偲び鶯老を鳴きにけり

六月二十七日 青風会東京例会選者吟

亀の子の日差を弾くほどの艶
森抜けて来て風薫る高原に
姦しき鳥語に消ゆる糸蜻蛉
雨音に羽音消されて花菖蒲
かがんぼの羽音ほどには高からず

六月二十七日 野分会東京例会

君の香の近付いて来る五月間
一匹が逸れ蟻の道乱れ初む
小鼓の一打に払ふ五月間
蟻を走る跳ぶ蟻の道出来るまで
蟻を見て蟻に見られて逃げられて
六月三十日 NHK文化センター
花菖蒲水惑星の片隅に
目で追へる幼の先の糸蜻蛉
微風に躓いてゐる糸蜻蛉
一輪が咲き五月間解けゆく

雑詠 廣太郎 選

寒日和日差し米粒ほど延びし 神戸 田中由子
 梅早し灘の酒樽積む社 同
 春菊のいろ見えてきし湯気の香に 同
 実南天恋人だつたひとの家 渋川 木暮陶旬郎
 冬紅葉雨の絵筆を加へけり 同
 銀色の雨降る冬のハーブ園 同
 逝くよりも逝かるる辛さ寒椿 大阪 酒井湧水
 街道の名残寒菊咲く祠 同
 もうもうと湯気厳寒の店先に 同
 大枯野一番星を追ひかけて 神戸 和田華凜
 島一つこがねに染めて大旦 同
 猿曳に笑ひ転げてふと哀し 同
 星遠くして冬の灯の大都会 袋井 湖東紀子
 光芒の空風花を舞はせたる 同
 風に剪る臘梅の香をこぼしつつ 同
 人の輪を飛上らせてとんど爆ず 香川 湯川 雅
 肩の尉払ひとんどの輪より抜く 同
 寒紅や些細な嘘をつい吐きぬ 同

今生に会ひたきものに雪女 熊本 岩岡中正
 黙々とマスクが通り過ぎてゆく 同
 ひたひたとウイルス殖えてゆく寒夜 同
 大空の碧より剥がれきし寒さ 東京 岩村恵子
 新しい命を囲み雑煮かな 同
 寒の富士心に一つ誓ふこと 同
 鶯の来鳴く吉野の宿に似て 長岡 安原 葉
 山里の白さ去りゆく春田かな 同
 見られぬし一步一步の春の泥 同
 密やかに河豚を料りて宿直す 徳島 岩田公次
 よく笑ふ客の来てゐる炬燵の間 同
 おでん屋の壁に市バスの時刻表 同
 薄氷にさざ波たたみ込まれゆく 龍ヶ崎 今橋眞理子
 寒林の揺さぶる空の青さかな 同
 雪やんでをり星空を引き寄せて 同
 朝市の客を持って成す焚火かな 静岡 須藤常央
 焚火守る句帳に火の粉浴びながら 同
 読んで焼べ読んで焼ぶる焚火かな 同
 先生の席ひとつ空く余寒かな 神戸 藤井啓子
 春の霜この通学路とも別れ 同
 公魚のかすかに糸を引きにけり 同
 闇払ひゆく一筋の初明り 同
 寝静まる頃より宴嫁が君 同
 震災の日を語り継ぐ息白し 同
 同 山田佳乃

雑詠句評（五月号より）

話せずも目と目はせつ寒見舞 大阪 酒井湧水

極月や兄を捜せば居酒屋に 加須 岡安紀元

一読、忘年会と称していつもより頻繁になのか、煤逃げめいて

いるのか、お酒が好きでどこか憎めない兄の様子が浮かぶが、作者を知ればこの「兄」は、昨年十二月二日に逝去された岡安仁義氏と分かる。仁義氏と同じ年の母千鶴子によると「近所の温泉に行ってから一杯やって帰るのが楽しみだっておっしゃってたわ」とのこと、なんとも羨ましい。この句が昨年末に作られたと考えると、在りし日の兄との思い出であり、行きつけだった居酒屋を覗くとそこに兄がいるような気がする、という作者の心情が感じられじんわりしてしまふ。仁義さんのあたたかいお人柄を偲び、ご冥福を心よりお祈りしつつ、献杯。（肖子）

兄上の岡安仁義氏を令和三年十二月に亡くされた。お酒の好きな仁義氏で、氏を探そうと思えば先ず居酒屋を覗くと必ずおられたのであろう。ユーモア溢れる中に、兄を慕う心持ちが季節を通して伝わってくる。（廣太郎）

「寒見舞」は、歳時記に「暑中見舞ほど一般的ではない」とあるが、新型コロナウイルス感染症が依然として猛威をふるっている昨今ではマスクをはずして話し合うことも出来ず、この句のような情景になるのであろう。作者の寒見舞の心情が伝わってくる句である。（葉）

重い病に臥せている人への訪問であろう。喋る事もままならず、なかなか意思の疎通が図れないが、作者の祈りを通してコミュニケーションをとる姿が神々しく見取れる。確かに心は通じているのである。（廣太郎）

小説の中のをんなを追ふ炬燵 波川 木暮陶句郎

まず何より、全体の構図の中で「炬燵」がしつかり動かないところが良い。この静かな自分の時間の中で小説の中のドラマに没頭する作者の姿が見えるような一句である。

さらに、この小説の中の「をんなを追ふ」と言ったところがポイントで、永井荷風のそれか、はたまた「追ふ」だから松本清張の社会派推理小説の中の「女」か。こうして、硬柔とりまぜて色々

と想像できて楽しいのだが、この「をんな」に作者ゆかりの夢二のおんなの影がちらりと見えるようで、私もかつて遊んだ伊香保の風光を思い出して、なつかしかった。(中正)

炬燵に入りながら読書をしているのである。ついついその小説の世界に入り込んでしまう。炬燵の心地良さも相俟ってすっかり小説の主人公になり切っているのかも知れない。季題の心地良さが読者にも感じられる。(廣太郎)

早春の街高階に望む富士 長岡 安原 葉

「早春」という季題には、やつと寒が明け、まだまだ風の冷たさは残るものの、溢れる日差しを感じさせる明るい響きがある。ふとしたところから富士山が見えることがあるが、この句も高いビルから思いがけず目にした景と思われる。作者の目の位置の確かさ。読み手は、一瞬にして早春の街を見下ろしつつ富士を望む高さへといざなわれる。「平明にして余韻ある句」の読後感が心地よい。(眞理子)

東京都内等の遠景に富士山が見えるホテルの高階の窓からの眺めを想像する。街並みが広がっているその先に悠然と富士山が聳

え立っている。早春のまだ凜とした空気の中、人工の街と自然との調和が美しい。(廣太郎)

虚子よりも三つ生き過ぎぬる秋思 相模原 木村享史

虚子は明治七年(1874)に生まれ、昭和三十四年(1959)に八十五歳で亡くなっているので、「三つ生き過ぎ」ということは、作者は今八十八歳ということだろう。いつも虚子の教えと共に生きて、特に八十路を過ぎ、一歳ずつ越えるたびに虚子への思いを深めていることに感慨を覚える。「三つ生き過ぎ」の思いに至った作者だが、客観的に見て、決して「生き過ぎぬる」ということはない。むしろ「生き過ぎ」ているからこそ、虚子のことをもっともっと広める使命があるのではないだろうか。そう思うと「秋思」ではなくこれからは誇りをもつて名譽と思つて虚子を伝える使者であつて戴きたい。(むつみ)

私見ではあるが虚子を直接知る人は、結構虚子の亡くなった年齢を気にされるように思える。汀子は虚子よりも六年長生きをして天に召された。作者は未だ三年である。もっと虚子の事を後世に伝えていつて頂きたい。(廣太郎)